

三国湊 緑のリレープロジェクト

旅人よ、一步踏み込んでください。
そこには、私たちの心のふるさとが、風味となって漂っている。

まちづくりと、森づくり。



GREEN RELAY PROJECT

足あと続くよこれからも

- H19年 夏
調査研究を行いました。
○「ナホトカ号重油流出事故」で提起された、自然環境、災害等の問題の調査研究
○三国湊の自然と人間との繋がり、自然との共生についての歴史的・文化的考察による調査研究
- H19年 11月24日
シンポジウムを開催しました。
○「三国湊自然との共生～ナホトカ号重油流出事故から10年」
○会場から「三国の里山保全を始めませんか?」と提案の声!
- H19年 12月～1月
活動方法を模索しました。
- H20年 2月～
「三国湊 緑のリレープロジェクト
～minato meets satoyama!～」がキックオフしました。
- H20年 2月
第1回「森の健康診断」
第2回「森づくりのプランをたてよう!」実施。
- H20年 3月
第3回「森をつくる人になろう!」実施。
○借りた市有地をワッキーの森、ナミの森と名づけ、プロジェクト名を通称「みどりレー」としてHPを開設。
○「森の健康診断」を小学生にもわかりやすい環境教育プログラム「森のことば」としてヴァージョンアップ。
- H20年 6月・7月・10月・12月、H21年 1月・2月
みどりレー実践活動
○下刈・チェーンソー講習+枯れ松伐倒体験・植樹にいたる実践的な森づくり活動を実施。
- H20年 11月20日・22日
第1回 里山保全・森づくり人材養成講座開催
○県内外のボランティアと2泊3日の「実践」×「ワークショップ」の講座を開催。
- H21年 3月20-22日
第2回 三国湊 森づくり人材養成講座
一海のきこえる森づくり開催
○11月の講座参加者が再集結!新たな参加者も加わり、地域間交流による森づくりは新たな一歩を踏み出しました。
- H21年 3月22日
第1回 ふくいミクマリ会議開催
○九頭竜川流域の活動団体と環境×観光×歴史文化×教育をテーマに持続可能な流域社会を探るネットワークを形成。
- H21年 6月・7月
第60回 全国植樹祭開催
○行政による海岸線の松枯れの処理が進んだため、活動地を丘陵地に移して里山活動を開始。
○借りた民有地を「ニノサクじいちゃんの森」と名づける。
- H21年 8月・9月・10月・11月・12月、H22年 1月・2月・3月
みどりレー実践活動
○下草刈り、枯れ木伐木体験、枝打ちなど実践的な里山活動を実施。
- H21年 8月19～25日
第1回 里山保全・森づくり人材養成講(ワークキャンプ)開催
○県内外のボランティアと1週間の里山体験、耕作放棄地の開墾、里山体験の「実践」×「ワークショップ」を開催。
○刈払機の安全講習会を開催し、参加者全員が終了証を取得。
- H21年 9月12～14日
第2回 里山保全・森づくり人材養成講(ワークキャンプ)開催
○伐木等作業従事者安全衛生特別教育講習会(チェーンソー講習会)を2日にわたり開催し、参加者全員が終了証を取得。
○最終日には1人1本つつ伐木を経験。
- H21年 12月5～7日
第2回 ワークキャンプ開催
○ドラム缶窯を利用した炭焼きに挑戦。
○シタケの原木の準備
○地元企業の日帰り里山ボランティア体験受け入れ
- H21年 11月14日
キノコの観察会

森の勉強会開催 森のカフェ micnicにて
●H21年 7月/第一回「白山信仰と雄鳥と森の関わり」大湊神社 神主 松村忠記 氏 ●8月/第二回「森の作戦会議」参加者全員でディスカッション ●9月/第三回「福井の森 伊勢神宮の森」福井市森林組合 稲葉充利 氏 ●10月/第四回「樹木医から見た森の世界」樹木医 今井三千穂 氏 ●11月/第五回「三国湊エッセル埋物語」みにく龍翔館 元館長 上出純弘 氏 ●H22年 1月/第六回「きのこから見た三国の森」福井きのこ会 会長 笠原英夫 氏 ●2月/第七回「野生生物と自然環境」越前松島水族館 館長 鈴木隆史 氏
- H22年 2月7日
第2回 ふくいミクマリ会議開催
○九頭竜川流域の暮らしを考える皆さんと環境×観光×歴史文化×教育をテーマにこれからの自然との関わり方をテーマに会場を巻き込んだパネルディスカッションを行いました。
- H22年 2月
ふくいミクマリ通信vol.1発行
○具体的な九頭竜川流域ネットワークの形成と情報交換・情報発信の場として発行スタート。

三国湊 緑のリレープロジェクト



〈NPO法人三国湊魅力づくりPJとは〉

NPO法人三国湊魅力づくりPJは、地域住民や来訪者に対して、三国湊を中心とした三国地区の魅力ある賑わいの創出と、環境の保全に関する事業などを行い、地域経済の活性化に寄与すること、循環型地域社会への創出に取り組むことを目的として、平成18年度に設立いたしました。当NPOの母体「三国湊魅力づくり実行委員会」は「ふくい地域ブランド創造活動推進事業」に認定され、平成16年から3年間にわたり、まちづくり事業を行ってまいりました。現在はその活動を継続し、楽しみながら、持続的・発展的に行っています。

独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金助成事業

MIKUNI
minato

その足をとめて、 この森で会おう。

脳裏に焼きついて、はなれない景色がある。
胸を灯し続ける、あたたかな思い出がある。
忘れられない、笑顔がある。

決して派手ではないけれど
日本の各地に心やすらぐ美しい風景がある。
三国湊はそんな町。

この町の夕日は格別だ。
夜の帳が静かに下りて、森が海に溶け出す頃
ほてった体を優しい風が撫でていく。

日中のハードワークが嘘のよう。
心地よい疲労感に体が笑う。
横でうなづく友人がいる。

ボランティアで始めた森づくり。
賑やかに楽しんだり、がむしゃらに走り回ったり。
季節を愛でるよりも、汗を流す方が多かったけれど
愛しい景観が台無しになっていくのを見て
じっとしてはいらなかった。

できることから始めよう。動き出した2007年。
ナホトカ号重油流出事故から10年を迎えた時だった。
バケツリレーに連なった地域の人とボランティア
よみがえった日本海に今日も夕日が沈んでいる。

三国に初めて来たという友人も
初めて見るのに、なぜだか感じる懐かしさ。
まるでそれは、心のふるさと。

町の小路が森へと続き、海に注ぎこむ景色を
この町の未来に届けたい。
その思いは今、物語となって紡ぎ出されている。





クロマツ・アカマツからなる
常緑針葉樹林

里山林

かつて防風・防潮・防砂林として、建築材、燃料として利用されてきた森。三国の海岸線では痩せた土壌でも育つ松が植えられ、利用・管理されてきた。松は土砂崩れや、伐採後に真っ先に生えてくるパイオニア樹木でもある。



シイ・タブを主とした
常緑広葉樹林

原生林

何百年・何千年と人が手をつけず自然遷移した森。守り伝えられてきた雄島の森や鎮守の森。



コナラ・クヌギからなる
落葉広葉樹林

里山林

里山の代表的な雑木林。伐採しても萌芽更新するため十五年～二十年サイクルで森が再生する。薪炭林・ほだ場・茅場・山菜や木の実の収穫・たい肥作り・建築材・・・様々な利用がされてきた。



スギ・ヒノキからなる
常緑針葉樹林

人工林

人が管理し手入れをする事によって育つ事が出来る。材の出荷と共に、自分の屋敷を建てる建築材にし、必要があれば切り出し様々な物に利用してきた。

三国の木林はこんな木林

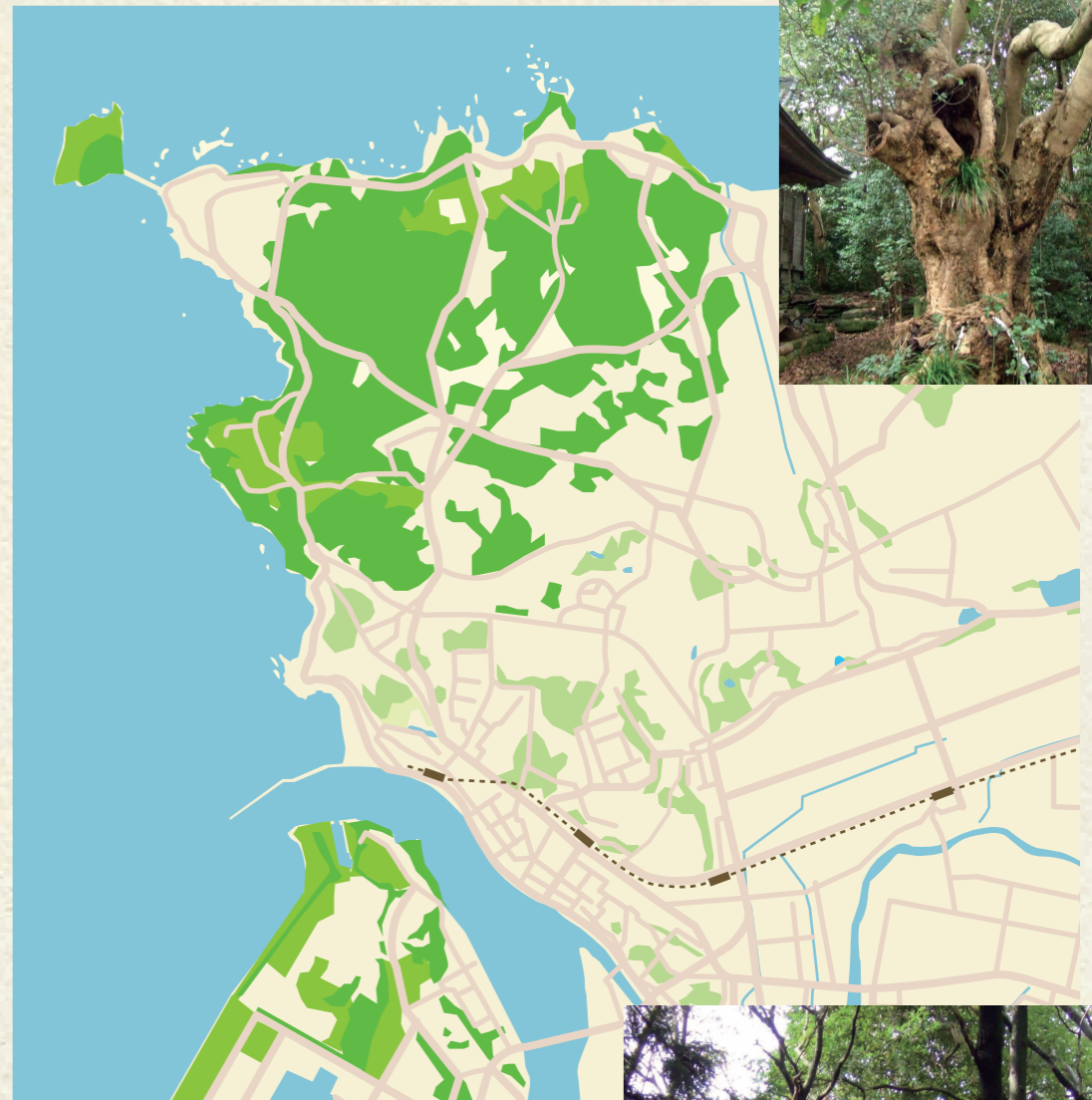


Illustration : Tada Hisayo



三国湊緑のリレープロジェクトとは

子どもから大人まで、誰もが取り組める里山活動です。

三国湊の緑豊かな環境を

未来の子どもたちにバトンタッチしていくこと。

それが「三国湊緑のリレープロジェクト」の目的です。

これまで行われてきた森づくりに学びながら

荒れてしまった里山を健やかにするための

お手伝いをしていきます。

実際の森は、これら様々な樹種が混ざり合い、複雑な植生になっています。



Illustration : Tada Hisayo

現在森は…

◎人工林

しっかり手入れされている森もあるが、間伐や枝打ちもせず放置されて光も入らず下草すら生えられない不健康な森や、雪折れや風によって倒れている森も多い。

◎マツ林

現在は里山が利用されなくなったため、落ち葉がたまり、松にむかない肥沃な土壌となり、松が弱体化して、マツノザイセンチュウ(松くい虫)により立ち枯れ、壊滅的な被害を受けている。

◎里山

ガスや電気に依存する燃料革命以降、里山が利用されなくなった事により、放置され、藪と化し、ゴミ捨て場となっている地域もある。



帯の幅ほどある町

古くは継体天皇の母・振媛が生まれた地として、室町時代には「三津七湊」の一つとして、江戸時代から明治にかけては、北前船の寄港地として、日本海へとそそぐ九頭竜川沿いに細長く横たわるこの町は、昔から日本有数の湊町として栄えてきた。

井原西鶴に「北国にまれな色里」と言わしめたほど格式の高い花街があり、芝居小屋や宿屋が賑わいをみせていた、歴史ある湊町。活気に満ちていた商人・職人文化の面影は、いまも私たちを楽しませてくれる。

「かぐら建て」の古い町屋や、軒下に敷かたの物置。レトロな雰囲気漂う旧森田銀行本店や旧岸名邸などの歴史的建造物。

北陸三大祭の一つとして今に残る三国祭。

小径へと二歩足を踏み入れれば、色濃く息づく歴史文化を肌で感じることができたらう。

そんな湊町の風情は、多くの文芸人を惹き付けた。

昭和を代表する詩人・三好達治も、その一人。彼が三国で過ごした5年間、たくさんの文人や作家が訪れ、そこから世界へと数々の名作が生まれている。また、近松門左衛門が作った歌舞伎の最高傑作「けいせい仏の原」の舞台も、ジャンクアートの巨匠・小野忠弘が作品を発表した場所も、三国湊だった。作家・高見順や、三国の遊女であり、越前を代表する女流俳人・哥川（かせん）らを生んだ三国湊は、いつの時代も「文学の町として」華やいできたのである。

昭和を代表する詩人の三好達治が、この町で5年間過ごしたうちに、たくさんの作家が訪れて名作を残したんだよね。三国は作家の高見順、遊女で女流俳人の哥川を生んだ文学のふるさとなんだ。

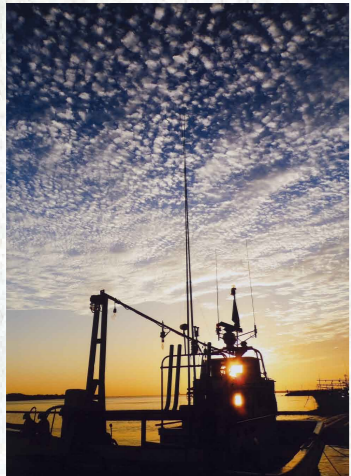
本当に食文化が豊かな福井。お年寄りの方も大きな口をあけて三国バーガー食べてくださるの。色んな人がやってきて、楽しい話を届けてくれるし、いい町だと思うなあ。



MIKUNI BURGER



生まれも育ちも三国湊だし、ボランティアガイドをやって6年になるけど、言葉にできないのはこの町の風情。汲みつくせない魅力があるんだ。



三国の森には、かつていくつもの山路が走り海の声がきこえていたという。

緑したたる木立ちに見える黄金さす海は生命の生まれ、帰るところ。息づく文化は自然とともにあった。

三国沖に浮かぶ雄島には、今も原生林が残っている。かつて海民たちに神の島と崇められていたこの島は今も昔も航海の灯を照らし、海を生きる人々にとってなくてはならない存在だ。

やっぱり海だね。漁をしなくても、見れば入りたくなるし、何より楽しいもん。



海のこえする山の路

始まりはナホトカ号。

大量の重油をすくったのは
高性能ポンプでなく、
人の手だった。



全国から30万人ものボランティアが三
国に集結したナホトカ号重油流出事故。
大量の重油をすくったのは高性能ポン
プでなく、人の手だった。ひしゃくです
くい、バケツリレーで運ぶ、誰でも参加
できるボランティアだった。

それまで持っていた地位や社会関係が
組みなおされ、大会社の社長も、フリー
ターの青年も、小学生も、みんな一人の
ボランティアだった重油回収現場。
「そんなことは無理だ」という思いこみ
から解き放たれ、「何とかできるんじゃない
か」「もしかしたらやり遂げられる
んじゃないか」というエネルギーに溢れ
ていたボランティア本部。

それまで社会に位置づけられていた
「私」が崩れたとき、そこに残った丸裸の
自分に何ができるのだろう。

それを探しだし、自ら行動を起こしてい
くのが、ボランティア。

どんな時でも、誰にでも、その人だから
こそできることが、必ずある。

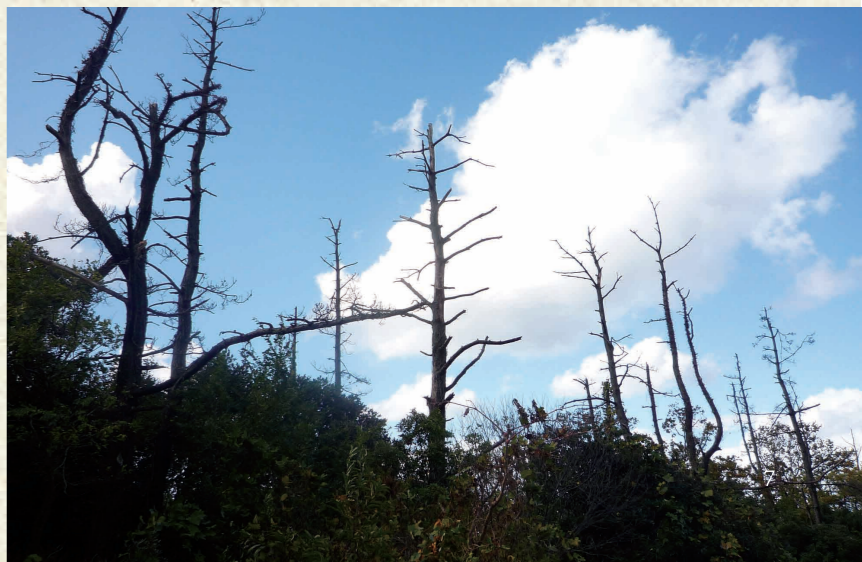
それは、どれほど小さな力と思えようと
も、何もないところから掴みだしたから
こそ代え難い輝きを放ち、社会を動かす
確かな力となることを、ナホトカボラン

ティアは明らかにしたのだ。
「よみがえれ日本海！」の思いは、文字通
り美しく光る海をよみがえらせた。
阪神・淡路大震災、ナホトカ号重油流出
事故を経て育まれた日本のボランティ
ア活動は、NPO法成立に結びついた。
ここ三国には、ボランティアの土壌があ
る。事故から10年を経た2007年、よ
みがえった海に感謝を込めて、「三国湊
緑のリレープロジェクト」がスタートし
た。重油を回収したバケツリレーに学
び、山・里・河・海がつながる三国の緑を
次世代にリレーしていきたいという願
いを込めて。

そして みどりリレーへ。

三国に多いマツ林。油気が多く、火
力もあるマツは古墳時代から製塩用
につくられ管理されていたという。

里山と人との
出会いの場をつくること



森を見れば時代がわかる。

マツは薪としても利用されたが、製塩が
石炭や石油によって行われるようにな
り、薪がプロパンに代わると、マツ林は
放置されるようになった。森を見れば
時代がわかるの言葉通り、荒れた里山は
鏡のように現代のライフスタイルを映
し出している。

土地が肥えると、マツは弱ってくる。そ
こへ北米産のマツを経由して、長崎に約
140年前から、福井には1953年前
後からマツノザイセンチュウが入った。
体長1ミリに満たないこのセンチュウ
は、マツの樹脂管を詰まらせ、枯死させ
る。天敵不在のまま膨大なマツ枯れが
日本海を北上し、ここ三国のマツは壊滅
的な被害を受けた。

2007年

里山と人との出会いの場をつくること。
誰でも実施でき、持続可能な里山手入れ
の手法を確立することを目指した取り
組みをスタートした。

「森の健康診断」では、里山の現状把握の
ため、植生と木の込み具合の調査を実施。
「森づくりプランを立てよう」では、調査

結果をもとに、どんな活動がしたいか、
どんな森をつくりたいか、そのために必
要なことは何かをワークショップ形式
で話し合った。

「森をつくる人になろう」では、プランに

もとづき、枯れマツ伐倒跡地に三国で採
取した種から苗木に育てたトベラ・シロ
ダモ・ヤマザクラを植樹し、下刈り
を行った。

「ずっと木を植えたいと思った。」「大
きくなるのが楽しみだね。」「これから
も、こんな風に続けていきたいね。そ
んな活動をして、もともと地域が好
きになっていく。3回続けた活動は、つ
まるところこの点に収斂されるのかも
しれない。」

2008年

借りた市有地をワッキの森、ナミイの森
と名づけ、プロジェクト名を通称「みど
りリレー」としてHPを開設。

「森の健康診断」を小学生にもわかりや
すい環境教育プログラム「森のことば」
としてヴァージョンアップし、専門家の
指導の下、三国にあった森づくりを協議
して、下刈・チェーンソー講習+枯れ松伐
倒体験・植樹にいたる実践的な森づくり
活動を実施した。6月・7月・10月・12月・
1月・2月と実施した活動を経て、森の景
観に少しずつ変化があらわれてきた。



賑わいの森づくり。

2009年、2010年

2009年、第60回全国植樹祭が福井で行われ、行政による海岸線の枯れ松の処理が一段落し、活動の拠点を丘陵地「二ノサクじいちゃんの森」に写しての里山活動が始まった。

毎月1回「週末のみどりレー」、「平日のみどりレー」を実施。新たに始めた里山活動についての基礎的な勉強、調査、草刈機・チェーンソー講習会などを「ワークキャンプ」で行い、実践的知識を身につけた。また、専門家を講師に迎えての「森の勉強会」では、毎月森に関するテーマで講習会を行った。

薪作り、炭焼き、シイタケ作りなど運び出した森の木をどうするか相談したり。小川沿いのぬかるみを歩きながら「ここに散歩道をつけたらたのしいだろうな」と想像したり。下草刈をしながら、「コナラやクリの幼木を見つけると「これは残したいね」と印をつける。「これはタラノ木で山菜として食べれるから残そう！春が楽しみだね。」小さな発見と楽しみ。森の魅力、自然とのつき合い方が

少しずつ広がってきた。

毎月1回週末のみどりレー、平日のみどりレー

2009年度は毎月第1日曜日を「週末のみどりレー活動の日」とし、「二ノサクじいちゃんの森」を中心に、下草刈り、危険木・倒木の処理等を実施。また週末の活動に参加できない方を対象に、平日のみどりレー活動を実施しました。薄暗く笹に覆われて人が入れなかった森。作業を進めるにつれ光が届くようになり、森の奥には小川が流れ、山菜やキノコも発見しました。これからどんな森に変化していくのでしょうか!?
一緒に森の楽しみを発見しませんか？皆様のご参加お待ちしております。



人のリズムと自然のリズムが出会うところ

二ノサクじいちゃんの森

2009年から活動をしている約0.2haのフィールド。コナラ・シロダモ・タブ・杉など現在は色々な樹種が混ざり合う森。今にも倒れそうな危険木や笹に覆われて近づくとさえてできなかったフィールドだったが、整備した森の中に小川が流れ、様々な種類の木々達が共存する素敵な空間になりつつある。山主さんの祖父の二ノサクおじいさんが大事にしていた大きく力強いフジヅルがシンボル。今後は遊歩道を整備して子供も大人も遊びながら学べる森にしていく計画が進行中。



緑の実りが
未来の子ども達の目に
広がっていますように。



100年後の木が足りず、森づくりを始めた伊勢神宮。巨木を倒すときは不思議な現象が起こるんだ。



三国の堤防は三国の森と深い関係があるんだ。

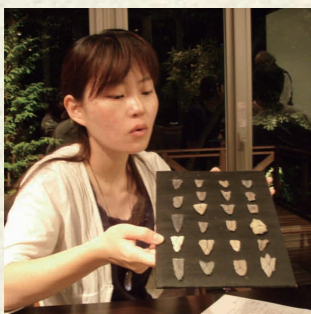


昔東尋坊周辺は福井藩の馬の牧場で、三国の森の狼が狙っていたんだ。その狼を退治した刀の話...



これまでの森の勉強会

- 第二回 「白山信仰と雄島と森の関わり」
大湊神社 神主 松村忠祀氏
- 第一回 「森の作戦会議」
参加者全員でディスカッション
- 第三回 「福井の森 伊勢神宮の森」
福井市森林組合 稲葉充利氏
- 第四回 「樹木医から見た森の世界」
樹木医 今井三千穂氏
- 第五回 「三国湊エッセル堤物語」
みくに龍翔館 元館長 上出純弘氏
- 第六回 「きのこから見た三国の森」
福井きのこ協会 会長 笠原英夫氏
- 第七回 「野生生物と自然環境」
越前松島水族館 館長 鈴木隆史氏



森の勉強会

三国の森の勉強会について
知りたい!

そんな願いから始まった「森の勉強会」。

毎月1回、場所は三国の森のカフェ。地元の方々に講師を依頼して、自然・文化・歴史などの内容で開催しました。

「森の勉強会」は、隠れた歴史や三国にそんな場所があったんだ！そんな生物がいたんだ！という地域の発見の場。そして、身近な方の専門のお話は、実践活動を行っていく上での様々な疑問や問題を解決するヒントが隠れていました。

季節の変化とともに景色が変わる森のカフェ。「今年はドングリが多いね」「フキノトウがもう芽を出したよ」そんな会話も楽しみながら、誰もが参加できる三国の新しい魅力発見の場ができました。



三国の里山にはここだけにしかない貴重な生物もいるよ。



キノコを見るとその森の状態がわかります。キノコで環境アセスメント(評価)もできるんだ。三国の森林はどうなっているかな?



ひろがり

三国湊緑のリレープロジェクトでは、森のボランティア活動、里山活動を応援する企業や学生のボランティアの受け入れを行っています。

週末のみどりレレ活動、平日のみどりレレ活動の1日体験の他、季節のワークキャンプの受け入れも実施しています。2009年度は大学生の体験型ワークキャンプ、地元企業のワークキャンプ、週末のみどりレレ活動の受け入れを行いました。

環境学習・森林ボランティアの研修プログラムを行います。

三国湊をフィールドに現地視察を通じて森林について学ぶことができます。下草刈り、伐木、散歩道作り、薪作り、薪ストーブ体験、塩づくりなど森林ボランティア活動を体験できる日帰り/年1回の研修プログラムをコーディネートします。(実費はご負担いただきます)年間を通じた環境学習・森林ボランティア研修プログラム、豊かな食に触れ環境を学ぶ農家民泊型研修プログラム、三国旧市街地・日本海・雄島原生林の小観光を兼ねた研修プログラムなど御社の環境CSR活動や企業風土づくりのニーズに応じた様々な研修プログラムをコーディネートいたします。(実費はご負担いただきます)



森・川・海のつながりを感じる三国町。いろいろなプログラムがあって楽しいよ。



「体験」しながら、森林についていろいろと学べます。

ゼロから始めたワークキャンプ

活動フィールドが移り、2009年ワークキャンプがスタートした。スタッフも参加者と共に「実践」×ワークショップを通して、1つ1つ勉強しながら「森をつくる人を育てる」入門編。

里山とは：(夏)

活動内容は森の活動と耕作放棄地の開墾・植樹、そして里海体験という森・川・海の里山を丸ごと体験するという内容。刈払機の講習会を受け、プロも使う修了証を手にした。これが自信につながり、森の下草刈りや耕作放棄地の開墾でお互いが安全に配慮して作業ができた。

暑さと闘いながらの開墾作業。耕作放棄地だった草むらと格闘し、スコップで穴を掘り、堆肥を運び、80本のクリの苗木を植えた。

専門家の講師を招き、里山とは何か？から始まり、凶鑑を片手に活動地の植物の名前を調べた。森の木に名札を付ける事で、「森」というものが、一本一本の木でできている事を実感し、木の名前を書き込んで森の地図を作った。その地図を手がかりに、どんな森にしていきたいか「森づくりプラン」を皆で考えた。今

まで緑があれば豊かだと思っていた森。木の名前がわかると、その森の状態が見え、森の変遷・歴史が見えてくる。限られた時間の中でアイデアを出し合い、議論を重ねていく。森を見つめる目が確実に芽をだした。

最終日はシュノーケルをつけて里海体験。九頭竜川が流れ込む三国は川と海が交わる場所。ウニやサザエ、海藻や魚の群れ；外からは想像できない豊かな海の世界がそこにはあった。森、川、海、海の世界を感じながら夢中になって海を覗いた。

チェーンソー講習会(秋)

秋のメインイベントは、チェーンソー講習会。チェーンソーは木を伐る便利な道具。しかし使い方を一歩間違えると大怪我や命にかかわる。講習会を受ける事により本人の危険回避はもちろん、周りの人たちにも何が危険でどうすれば安全作業ができるかを知る、リスク管理の意識を高めることが目的。

2日間の講習でチェーンソーの使い方・危険性、伐木の方法等を学ぶ。専門用語や様々な木の切り方の実習を終え、最終日には1人1本ずつ木を倒した。予想以上の迫力、木の持つ

生命の力、神聖な雰囲気思わず息を呑む。終了証は初めの一步。いい経験で終わらせず、この先のみどりリー活動、他地域での活動や今後の人生で活用していきたい、という思いが湧いてきた。

炭焼(冬)

冬はドラム缶窯を利用した炭焼きに挑戦。

まず、コナラの木を森から切り出し、ドラム缶に入れ、焚口に火をつける。途中で火が消えかけて、あわてて火力調整をしたり、雨が降り始め焚口に水がたまっただけでかきだすなどハプニングの連続。事前に色々勉強したが、理屈通りいかない。予定より5時間遅れて、空気を遮断して火を消したのは、夜中の3時過ぎだった。翌日、恐る恐るドラム缶の蓋を開けると、量は少ないが、コンコンという音がする炭ができていた。その炭を使い、仲間が作った原木椎茸を焼き、三国の海水から作った塩をつけて頂く。文句なしのおいしさ。思わず笑みがこぼれる。自分たちで考え、工夫し、試し、行動することで、森との距離がグッと近くなっていくのを感じていた。

ワークキャンプを通して

日帰りの活動では味わえない、仲間達と共に、自然との暮らしを楽しむ。里山の手入れをし、薪を切り出し、炭を焼き、薪や炭で暖をとる調理する。普段では信じられない量のご飯を食べた。なれない布団なのにぐっすり眠れた。森や畑で汗水たらし、しっかり働き、朝昼晩しっかり食べ、しっかり寝る。私たちの暮らしは自然から切り取られているのではなく、つながっている。こんな、当たり前のような生活が、実は最高の贅沢であり幸せである事を知った。

里山での実践活動やワークキャンプを通じ、森・川・海、つながりを体験し、自然の大切さ、自然との暮らし・循環型の暮らしの素晴らしさを感じてもらえる場所でありたい。そして、今の時代これからの未来にあった人と自然の関わり方を模索していきたい。

夕日を見ながら三国湊を散策すると、町屋が軒を連ね、ゆったりとした時間が流れている。昔からの人々の暮らしやつながりが垣間見れる。港町ならではの風情を感じながらの街中散策。働いた体に地元食材のジェラートがしみわたる。明日のお昼は三国パーガーにしようかと普段はみんで自炊だが、こういうのも楽しみの1つ。空腹にしみる食材は全部地元で取れたもの。地元の方も加わって、賑やかな食事に会話が弾み、顔がほころぶ。

地域を愛する人がいる。その地を訪れる人がいる。人と自然が繋がる街で、ゼロから学びつくりあげたワークキャンプはこれからも続いていく。

三国という町をまったく知らない自分が、ちょっとしたきっかけで思いもよらない魅力に触れることができました。



興味はあっても実際に関わることができなかった里山体験。一歩踏み出すことができた。

木の聖なる力、生きている力というのかな。自分が木を倒す、木が倒れるってことを体験して感じました。

ドラム缶の炭焼きって面白い。知恵と化学が詰まっている。作った炭でバーベキューって最高なんだ。



講習会の目的は、チェーンソーの危険を知り、自分の身を守るために勉強すること。

原生林は里山と違った雰囲気。雄鳥、また行きたいな。

海の中って不思議な世界！川と森と海がつながって知っていたけど、体験したのは初めてでした。



枯れ木を倒して、薪にして、炭や塩づくり。秋はアケビ、ムカゴ、春はスミレに山菜。来るたびに季節の変化と楽しみがあるのがいいね。薪で沸かした足湯、最高～！

修了証もらえてうれしい！無駄にしないようボランティアに参加していきたいです。





九頭竜川流域ネットワーク

「ミクマリ」の形成

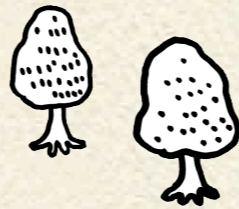


福井県面積の約七割を占め、七市三町と岐阜県郡上市を貫く九頭竜水系は、霊峰白山を頂とする山々を源に発し、コシヒカリのふるさと福井平野を流しながら、サクラマスや鮎を育み、日本海へと注いでいます。この大流域を舞台とした水と緑の交通は、彼方の大陸までを環内に人・モノを活発に行き来させ、豊かさを運び、独自の文化を育んできました。

ミクマリとは水配り（みくまり）。

田の神・山の神と深い関わりを持ち、水源や分水嶺に祀られている神の名です。いのちと暮らしの源である水は豊かさの源泉。その分配を考えることは将来にわたって環境を考えること。

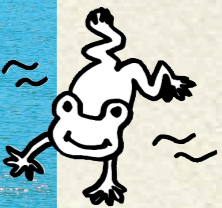
九頭竜川流域では多様な環境活動をしている団体や住民の方々と緩やかなネットワークを作り、時には協力し合い、時には刺激をうけあいながら、より一層の活動の充実とその広がりに期待したいと、九頭竜川流域ネットワークを築いていきたいと思います。



環境×観光×歴史文化×教育をテーマに、「ふくいミクマリ会議」を開催し、「ふくいミクマリ通信」の発行と共に、まずは第一歩をふみだしました。

上流から下流、支流から本流。同じ九頭竜川水系とはいえ、文化・歴史・環境・生き物、気候、人々の暮らしなど少しずつ違います。

打ち合わせのために各団体を訪れた2月。うっすら雪化粧の三国湊でしたが、上流の池田は2mの積雪。小原は訪れることが困難との大雪でした。カニ漁が盛んな三国湊、サクラマスの遡上が始まり釣りの解禁となる九頭竜川、池田ではイノシシ漁が始まりました。気候の違いから、人々の生活も道具も景色も違ってました。そんなちよっとした発見・関わりの中でそれぞれの地域が少しずつつながりを感じられるネットワーク作りを目指します。



第1回 ふくいミクマリ会議

九頭竜川流域ネットワークの未来に向けて

2009年3月22日



第2回 ふくいミクマリ会議

九頭竜川流域ネットワークの未来に向けて

2010年2月27日



1部 基調講演

「森の健康診断から流域の健康診断へ
—持続可能な流域づくり—」

◆講師

丹羽健司氏 (伊勢三河流域ネットワーク世話人
矢作川水系森林ボランティア協議会代表)

2部 パネルディスカッション

「めぐる緑とめぐる未来の二頁
—動き出したミクマリの環—」

◆パネリスト

國吉一実氏 (小原e.oプロジェクト代表)
長谷川浩氏 (環境パートナー池田理事)
上田嘉彦氏 (福井県永平寺町御陵小学校教諭)
山崎一之氏 (NPO法人三国湊魅力づくりPJ副理事長)

1部 基調講演

「森林の可能性
—未来につなげる森林づくり—」

◆講師

鋸谷茂氏 (フォレストアミーティ研究所副所長)

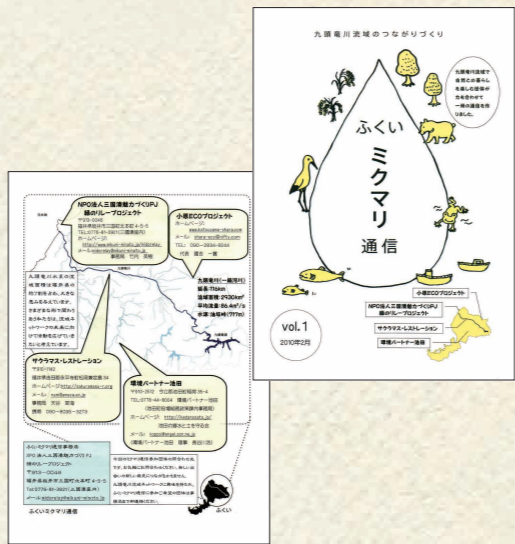
2部 パネルディスカッション

「ミクマリからの贈り物
—今の時代、これからの未来の自然とのかかわり方—」

◆パネリスト

鋸谷茂氏 (フォレストアミーティ研究所副所長)
長谷川浩氏 (環境パートナー池田理事)
天谷菜海氏 (サクラマスレステレシジョン事務局)
伊藤直樹氏 (ふくい新聞社 コウノトリ支局)
司会・進行
山崎一之氏 (NPO法人三国湊魅力づくりPJ副理事長)

ミクマリ通信 vol.1



情報交換と各活動の報告、そして流域に住む住民の方々に楽しく広報していければと、各団体が原稿を持ち寄り、第2回ふくいミクマリ会議に合わせて「ふくいミクマリ通信vol.1」を発行。初回は4団体でスタートを切り、今後少しずつネットワークを広げ、賛同いただける多くの活動団体と共にこの「ミクマリ通信」を発展させていきたいと思えます。

九頭竜川流域ネットワークに興味を持たれ、ふくいミクマリ通信に参加ご希望の団体は三国湊緑のリレープロジェクト事務局までご連絡ください。
ホームページからも御覧いただけます。
<http://mikuni-minato.jp/midorelay>



三国湊 緑のリレープロジェクト サポーターズクラブ

参加者募集

三国湊緑のリレープロジェクトサポーターズクラブは、
三国の里山保全・森づくり活動への支援を目的に設立されました。
例えば、枯れマツ1mを伐倒して搬出するのにかかる費用は約30,000円。
三国の枯れマツの規模は約80haです。
活動を持続可能なものとするために、プロジェクトをサポートください！
頂いた寄付は、里山保全・森づくり活動の直接費用にあて、それ以外の用途に用いることはありません。

ボランティアに ご参加ください！

里山活動を通して楽しみながら森づくり。
スタッフとして、ワクワクしながら
みどりレーをサポート。

一人一リレ！ 応援ください！

一口1,000円のサポーターになって、
活動をご支援ください。

あなたとできること。

◎お申し込み方法

いずれのサポーターを希望される方も、住所・氏名・tel・fax・メールアドレス・所属をご記入の上、下記まで fax または メールでお申し込みください。
<http://mikuni-minato.jp/midorelay/volunteer> (ボランティア参加希望の方は、こちらの URL からお申し込みも可能です！)

◎お申し込み & お問い合わせ先

NPO 法人三国湊魅力づくりPJ
〒913-0046 福井県坂井市三国町北本町 4-5-5
TEL. 0776-81-3921 (三国湊座内)
FAX. 0776-81-3225
<http://mikuni-minato.jp/midorelay>
mail.midorelay@mikuni-minato.jp

合わせて、下記の口座に所定の金額をお振り込みくださいます様、よろしくお願いたします。

ゆうちょ銀行口座

・ゆうちょ銀行
・通常貯金：13370-8037131
・口座名義
「特定非営利活動法人三国湊魅力
づくりPJ サポーターズクラブ」

福井銀行口座

・福井銀行/三国本町出張所
・普通預金：1092879
・口座名義
「特定非営利活動法人三国湊魅力
づくりPJ サポーターズクラブ」



サポーターズクラブの新たな試みとして、三国の協力店に入金箱を置かせてもらい、みどりレー活動で作った塩と交換できるようにしました。
三国の海水を薪で2日間煮詰めて作った塩は、ミネラルたっぷり。おにぎりや隠し味にいかがですか。活動を持続可能なものとするために、プロジェクトをサポートください！

「心のふるさとをつくる」「心とは 可能でしょうか。」

昭和を代表する詩人に三好達治という人がいます。大阪の生まれですが、昭和19年より5年間、居を構えた三国に「わが心のふるさと」という言葉を残しました。
「かかる境にけふも来つ／海のこえする山の手」。彼が歩き見たであろう風景は今、環境の変化により大きく変わろうとしています。
数十年前まで、野良仕事がつくりだしてきた里山は、燃料の宝庫であり、たくさんの生きものの住みかであるとともに、大気・水質浄化など多くの機能を持ち、人間が自然と交わる場所でした。化石燃料に依存するエネルギー革命以降、里山は利用されることなく放置され、笹に覆われて人を拒絶しています。松林は利用しないことにより、松に向かない土壌になり弱体化が進み松くい虫により壊滅的な被害を受けています。大雨が降れば、山の保水力が少なくなため、土砂が崩れ流域に押し寄せ、数になった里山はゴミの不法投棄の山に、枯れた松は倒木の危険を伴い、松の防風・防砂林を失った海岸線では強風が民家を吹きぬけています。
森へ入る機会はほとんどなくなり、若者は都市へ流れ、ライフスタイルの変化などにより、



地域の自然環境は荒れたまま放置され、景観は痛ましいほどに壊れてしまいました。大変な労力を必要とするのに、お金にならない森の保全。その一方、森の荒廃は海の荒廃をも連鎖させていきます。
誰がこれを止めるのか。気づいた人がやり始めるしかありません。重油で汚れた海にバケツをもって飛び込んだのも、地元の漁師や海女さんでした。三国へ各地からボランティアが集い、バケツリレーが開始され、海は奇跡的によみがえったのです。
どんな時代もそれに続く時代を夢見ています。この町は、私たちにとってかけがえのない大切な場所であるとともに、訪れる旅人の愛すべき場所であってほしい。私たちは、地域内外のボランティアとともに状況の打開に取り組みたいと考えて、三国湊 緑のリレープロジェクトを始めました。それは、森づくりを通じて、心のふるさとをつくること、それを通じて子どもたちにつないでいくことを目指しています。その一歩は、踏み出されたばかり。小さな波紋がやがて大きな輪をつくっていくように、私たちは、いつでもこのリレーに連なってくれる方を待っています。